

古市公威に見る、土木の新しいかたち

藤井 聡

有史以来の哲学者と宗教家の全ての仕事を足しあわせたとしても、その重要な論点の全ては、既にソクラテスや孔子、キリストや仏陀によって語られ尽くされているのだ、ということしばしば指摘される事柄である。事実、学べば学ぶほどに、そして思いあぐねれば思いあぐねる程に、確かにそうかもしれない——なる思いを深くする方々は決して少なくないようである。だとすると、「新しい土木のかたち」を考える縁はその歴史の起点にある、との見込みもまた、さして検討違いでもなさそうに思えてくる。

かくして、^{ふるいちきみだけ}古市公威、である。

古市は初代の土木学会会長であるが、彼が土木学会の設立を必ずしも喜んではいなかった、ということをご存じであろうか。土木学会は工学会なる工学全般を取り扱う学会から分離独立したのであるが、古市はその分離独立に深い憂慮の念を抱いていたのであった。

なぜか。その答えを古市の土木学会会長就任演説の言葉の中に、探ってみることとしよう。

古市は、「(土木学会の会員は) **技師である。技手ではない。将校である。兵卒ではない。すなわち指揮者である**」と述べた上で、土木学会をもし設立するのならば、「**研究事項はこれを土木に限らず、工学全般に広めることが必要**」だと訴える。そして、「**本会の研究事項は工学の範囲に止まら(ない)**」と宣言し、土木における人文社会科学の重要性を訴えた後に、「**数え上げれば、なお外にどのくらいあるかわからない**」との言葉に繋げる。つまり、「土木学会」なるものを設立するのであるのならば、その範囲は想像もつかぬほどに果てしない広がりを持つべきだ、と考えていたのである。だからこそ、土木学会なる「^{たごつぼ}蛸壺化」をもたらし兼ねない専門学会を設立することに、深い憂慮の念を抱いていたのである。

ただし、彼は単に土木の「遠心力」(拡散しようとする力)のみを語ったのではない。彼は土木という言葉に秘められた「求心力」(中心に向かおうとする力)の重要性を語ることを忘れてはいなかった。それは、次のような、彼の演説最後の一言に表れている。「**会員諸君、願わくば、本会のために研究の範囲を縦横に拡張せられんことを。しかしてその中心に土木あることを忘れられざらんことを**」。

「拡張し続けるもの」が「形を変えぬもの」であろうはずはない。しかし、その変化は断じて「糸の切れた凧」であってはならない。その中心に「土木」なるものを見据える求心力を携えた変化でなければならぬ。だとするなら、土木屋なるもの、土木の新しいかたちとは何かということを探し続けると共に、土木における変わらぬものとは何かということを問い続けねばならぬのであろう。古市の言葉は、そうした土木屋として持つべき当然の精神のフォルム(形)を、我々に思い起こさせるに足る十分な力を、未だ衰えずに^{たな}湛え続けているのである。

古市公威(ふるいち きみたけ、あるいは、こうい) 1854年に姫路藩士の子として生まれ1934に没す、工科大学(東京大学工学部の前身)の初代学長、内務省の初代土木技監、貴族院議員、そして初代土木学会会長を勤める。内務省土木局のトップとして全国の河川治水、港湾の修築等を通じて、日本近代土木行政の骨格を作る。なお、作家三島由紀夫の本名、平岡公威(きみたけ)は、内務官僚であった彼の祖父平岡定太郎が恩顧を受けた古市の名をとって命名したといわれている。また、土木学会就任演説は、土木学会のホームページにて全文掲載されている。